

『中日大辞典』の編纂 ①

今泉潤太郎

一 『中日大辞典』の誕生まで

辞典原稿カードの返還 本学創立二十周年記念事業の一つとして始められ十三年の歳月を費やした『中日大辞典』は、一九六八（昭和四十三）年二月刊行された。

愛知大学における中国語日本語対訳辞典の編纂は、本学の前身ともいえるべき東亜同文書院（のち大学）における二十余年間の華日辞典編纂事業を受け継ぎ完成させたものである。

東亜同文書院（大学）における学術研究は全教員から組織された支那研究部によって推進されていた。その中に設けられた華語研究室では中国語教員の手で一九三三年頃から華日辞典の編纂が始められ、敗戦時には約十四万枚（七、八万語）の未整理原稿カードが作成されていた。¹

一九四五年八月、敗戦によりこのカードも同文書院財産の一部として国民政府教育部京滬区特派員辦公処（委員長蔣復璁・委員鄭振鐸ら）によって敵産として接収された。²

東亜同文書院大学の最後の学長であった本間喜一本学第二代学長は、一九四九年の新中国の成立をみるに及び小岩井浄法経学部長と相談し、同文書院の中国語教員として華日辞典編纂事業を進めてきた鈴木擇郎教授に対し、カード返還を中国側に要望してみてもどうかと熱心に説いた。

中華人民共和国の出現にともなう言語環境の激変により原稿カードが利用に堪えぬものとなったこと、辞典編纂は長期にわたる困難な仕事であること等から、逡巡する気持ちが強かった鈴木教授も本間学長の熱意におされ、またカード接収に立ち会っていた際に接収委員の鄭振鐸氏³（著名な文学者）に対し、もし将来事情が許すようになったら、われわれの手でこの辞典を完成させて欲しいと述べたことを思い出し、賛意を表した。

本間学長の指示により一九五〇年末、鈴木教授は中国側にこの要望を伝えるべく、同年一月に発足した日本中国友好協会に協力を求めた。同会は本間学長も理事をつとめ、日中間に正式の国交のない間、唯一民間外交を担った組織として中国側にも認知されていた。

また、本学国際問題研究所内に豊橋支部事務所を置き、支部役員・会員も大半は本学教職員学生であった。同会は快く協力を約し、ただちに島田政雄本部理事から中国側の康大川氏に愛知大学の要望は伝えられた。島田氏は同会の文化教育担当者、康氏は中国新聞総署国際新聞局日語科長であり、当時両氏は、日中両国間の出版物に関する業務責任者の立場にあった。

さらに、一九五三年春、折から始まった中国在留邦人の帰国問題を話し合うため訪中し

た日本中国友好協会内山完造理事長からも、直接、郭沫若中国科学院院長に伝えられた。やがて中国側から『人民中国』編集部宛てに要望書を出すようにとの助言を受け、同年七月、あらためて本間学長名で原稿カード返還要望書が郭沫若・鄭振鐸両氏宛てに内山理事長を経て提出される運びとなったのである。

翌一九五四年四月十日、中国人民保衛世界和平委員会劉寧一秘書長名で内山理事長宛てに返事が届いた。

貴方が本会郭沫若主席に出された手紙をうけとりました。貴方が過去上海において編集された「華日辞典」のカードの件について私たちは各方面をさがしましたがすでに関係部門の協力によりさがしだすことができました。

この「華日辞典」のカードは日本が投降したとき国民党の国立編訳館に接收され、当時すでに一部が遺失しておりましたがなお十四万枚が保存されており、解放後わが国の人民政府に接收されたものであります。

この辞典カードは敵産として没収したものであり、本来ならば、おかせできないものであります。中日両国人民の友誼と文化交流促進の見地から、今はわが会がうけとり、文化交流の賜物として日本の方々にはわが会からお送りするものです。

私たち相互の協力により中日両国人民間の文化交流が日ましに発展し、両国人民間の友誼の日ましに強固なることを信じております。かなりの数にのぼるこのカードを郵送することは不便でもあり、万一遺失するがごときことになればきわめておしいことでもありますので、どのようにしてお送りしたらよろしいか、なにとぞご返事ください。

この返信は日本中国友好協会本部機関紙『日本と中国』一九五四年六月十一日号に、「講和もまだ成立していない交戦状態継続中の国の国民に対し、このような措置がとられたことは歴史上稀有なことである」との編集部のコメントをつけ報じられている。

辞典カード所在を探索した経緯は島田政雄氏によれば次のようである。

島田氏の依頼により康大川氏は国際新聞局秘書長に調査を依頼した。その結果辞典カードは鄭振鐸氏のもとにあることが判明したので、この旨を上司の喬冠華・新聞総署国際新聞局長（のち外交部長）に報告した。しばらくして辞典カードは返還することになり、あとはこちらですということ、本件は康氏の手から離れた。⁴

原稿カード返還までに至る過程で、中国側でどのようないきさつがあったか調べるすべもない。しかし、ことは民間の小事であり、ものは経済価値ゼロに等しくとも、中華民国政府が敵産として接收した日本人の在華資産を、中華人民共和国政府がその持主である日本人の要望により返還するか否かという、高度な政治的判断が求められる性質の問題である。おそらく党・政府首脳のもとにあげられ、その指示を仰いで上述の如き措置となつたものと推定される。

これをうけて日本中国友好協会は在華邦人の引揚船の興安丸を利用して引き取ることに

し、受取り使節として伊藤武雄日本中国友好協会理事長・鈴木擇郎教授らを派遣することとしたが、外務省から旅券が発給されず、やむなく乗船代表の島田政雄理事が代理して受け取ることとなった。九月下旬、興安丸に搭載された辞典カードは大型木箱二個に収められ、舞鶴港に到着後、東京の日本中国友好協会本部へ運ばれた。

日本中国友好協会は、この原稿カードは新たに日本人民に贈られたものであるとの確認のもとに本間学長ら愛大関係者および、このカード作成に従事した元東亜同文書院大学中国語教員らを招致し、受け取った原稿カードの処置をめぐって協議した。その結果、もとの関係者が多く、かつ辞典完成に熱意と実行力のある愛知大学にこれを委ねることに参加者全員の意見の一致をみたのである。

この結論を得て、本間学長は本学の手で日本人民を代理して、華日辞典を編纂することを正式に大学評議会に提案することとした。かくして十二月八日、原稿カードは愛知大学に到着した。なお後日この措置をめぐり、一部から非難がましい動きもしたが、それは辞典完成の責を担っている愛知大学として認められるはずもなかった。

初版の編集

一九五五（昭和三十）年二月の評議会によってこの華日辞典編纂という意義ある歴史的事業を完成するため、本学がその任にあたるのが正式決定された。

戦後、無一物から出発した本学はようやく十年目に入り、あらゆる面において基盤の整備が緊急課題とされ、特に財政面では慢性的な収支のアンバランス状態にあり、長期にわたり多くの経費を要する辞典編纂の事業化に対して強い危惧の念をいだく向きもあった。

このため、本間学長は辞典編集の意義を学内に対して大いに説得することにとめるとともに、大学財政に負担をかけぬように辞典刊行を遂行させるべく「華日辞典刊行会」を設立させた。これはこの辞典に対して広く外部の意見を仰ぐとともに、辞典出版上の情報を広く集め、さらに将来の出版に備えて外部資金の導入を意図して設けられたものである。

一九五五年六月正式に発足した華日辞典刊行会は、本間学長・小岩井法経学部長・山崎知二文学部長・鈴木教授ら学内関係者および、学外から伊藤武雄氏と東亜同文書院大学中国語教授であった熊野正平一橋大教授・野崎駿平東北大学教授・坂本一郎神戸外国語大教授らを評議員として構成された。

刊行会設立に先立つ同年四月、華日辞典編集委員会が組織され、正式に「華日辞典編纂處」の門札が現在の大学記念館西側、豊橋鉄道渥美線緑いの建物（旧陸軍養生舎。現教職員組合事務所）に掛けられた。委員長に鈴木擇郎教授、専任者として編集主任内山雅夫教授（東亜同文書院大中国語教授）・張祿澤講師・今泉潤太郎嘱託を聘し、同時に兼務専門委員として桑島信一教授（東亜同文書院卒）、協力委員として学内外の中国関係専門家若干名を委嘱し、一応の陣容が整った。当初は東亜同文書院大学の中国語教員を極力招聘する方向で折衝が行われたが、結局、発足当初は前記メンバーということになった。この後、編集が進捗するに従い、一九五七年には東亜同文書院卒の遠藤秀造・宗内鴻阿氏、志村良治・杉本晃ら各氏を委嘱し、編集陣も強化された。おかれて東亜同文書院中国人講師の欧陽可

亮氏も短期間加わった。

編集にあたってこの辞典を、中国語を通して現代中国を多面的に深く理解するための工具書（編注 中国語で参考書のこと）と位置づけた。このため特に語彙面では現代漢語を中心とし、中古白話・古漢語も最低必要範囲内で収録し、重点的に中華人民共和国の新事象を反映する政経用語から科学技術用語・動植物用語に至るまで広範囲に、可能な限り一次資料から語を採ることとし、用例と解説に当たっては中国小百科辞典の如き性格をもたせ、漢字・発音表記その他、できるだけ規範化され、かつ実用性に富む中日辞典をつくることとした。この編集スタイルは他の追隨を許さぬ『中日大辞典』の特徴となり、今日に及んでいる。

また、使用する漢字は可能な限り簡化字を採用することとし、発音表記や文法用語、さらに解説など内容全般についても、中華人民共和国において制定された言語規範化の方向に沿うことを心掛けた。しかし、日本人のための中国語辞典であるという観点から、見出し語として掲げる単語認定の規準をゆるくし、できるだけ広く多くの語を見出し語として出したことや、解説に当たっては客観・中正を保つ姿勢を貫いたことなどは、編者としては当然のことであったとはいえ、後々議論をよぶこととなった。

開始に当たって編集に四、五年、印刷に二年、計五、六年はかかると大雑把に見込み、編集の進捗によって計画を修正していくこととした。返還された原稿カードの点検を終えてみると、このまま使用できるものは皆無に近かった。カードは必要に応じて用例その他に利用することとなるであろうとは編集前から予想されていたが、二十七年の歳月は中国語をとりまく環境を変えたばかりか、中国語そのものをも一変させてしまっていたのである。⁷

歳月の経過と社会の変動によって姿を消した語の整理、新たに現れた語や用例の採録のほか、次々と発表され実施される一連の言語改革、すなわち簡化字の発表、印刷通用漢字の制定、異体字の廃止、拼音（中国式ローマ字発音記号）の採用、異読音の整理、標準音の制定など、辞書作りの根幹にあたるものの採入れに追われるなかで時間は過ぎていった。

編集の過程では内外からの援助があり、中国側からも多くの援助をうけた。華日辞典編纂処開設後は中国人民対外文化協会から各種図書資料が多種送られてきたが、中国図書の手が困難な当時にあつて、まことに得がたい貴重なものであつた。これは特に一九五五年十二月、郭沫若氏を団長とする戦後初の訪日団である中国学術視察団の副団長馮乃超中山大学副学長が本学を訪問して辞典編纂処を激励し、帰国後関係方面に報告した結果であつた。

一九五八年五月には愛知県平和代表団副団長として鈴木教授が訪中して、郭沫若氏と会見したほか、中国科学院語言研究所や文字改革委員会を訪問し、辞典編纂上有益な教示を得て帰国した。また一九六六年豊橋市長河合陸郎氏が訪中する際、脇坂雄治学長は河合市長に「中日大辞典に対し寄せられた郭沫若氏の好意と協力を深く感謝する。おかげで近く辞典は出版される」との謝辞と近況報告を託した。これに対して郭氏から同市長に託して

雄渾な筆跡「激濁揚清」が贈られ、本大学の辞典編纂事業を励ました。⁸

学外からも資料提供や単語蒐集などの協力があった。なかでも華日辞典刊行会理事の坂本一郎神戸外国語大学教授や、NHK国際局の佐藤堅一氏からは数年にわたり多数の新語カードの提供をうけ、また渡辺美登里女史は中国料理に関する専門語を多数寄せてきた。さらに中国研究所の好意により資料カードを借用することもできた。学内の中国関係教員や学生らの協力・援助も少なくなかった。

この他、外部からは財政面でも援助もあった。とくに一九五六（昭和三十一年）七月、文部省科学助成金機関研究費の交付をうけ、翌五七年には朝日新聞社・中日新聞社・蒲郡市在任の匿名氏などから総額五百万円にのぼる助成金の提供をうけた。また二名の方から「貧者の一灯」といって少額の寄付がよせられたことも辞典関係者を感激させた。

このようななかで編集は進捗していったが、この事業の大きさに比し編集陣容ははなはだ貧弱と言わざるをえなかった。当初たてた一九六一年頃という完成目標が大幅にずれこむ見通しとなつてからも、さらに予定を延ばさざるをえない編集上の問題も出て、そのつど大学当局や、当初より編集出版上の助言を得てきた株式会社大安の関係者に迷惑をかける始末となり¹、結果的に期間は予定の二倍となった。このため大学財政のひっばくもあり、一九六三年後半以降は経費節約のため編集陣容を半減し、別途人件費を必要としない鈴木・内山・張・今泉の四氏のみとなった。事務当局からは辞典編纂処の建物の明け渡し、完成時期の明示を求められるなど、編集開始以来ずつと夏休み・冬休み返上で努力してきた編集メンバーにとつて気の重い時期もあった。本間氏はすでに名誉学長になつていたが、来学時には必ず編集メンバーを励まし、辞典の進捗に常に関心をもつた。

一九六五年、辞典原稿はようやく一応の脱稿をみた。組版をすれば優に二千ページを越す規模となると推定される。国内外を問わず中国語各国語対訳辞典は戦後も何種類か出版され、中国語日本語対訳辞典だけでも三、四種類出ていたが、当時最大の規模となると予想されたので敢えて愛知大学『中日大辞典』と命名することとした。

辞典出版のため組織されていた華日辞典刊行会では当初から本間学長が、平凡社・岩波書店・三省堂など大手出版社に対し打診をしてきたが、いずれも成約には至らなかった。

一九六六年、本学創立二十周年記念事業の一つとして『中日大辞典』刊行の補助が決定され、予想印刷費の約半額程度が約束されたので、辞典刊行会は自力で残額を調達して自費出版することに踏み切った。辞典出版計画には以前から榊大安の小林実弥社長から助言を得てきたが、正式にこの辞典の出版発売が同社に委託された。小林社長及び小池洋一専務とともに東亜同文書院の卒業生で、同社は当時、日本における中国書籍文物輸出入販売専門店であり、日中学術文化交流の裏方として大きな役割を果たしていた。小林社長らは本間・鈴木両氏からの要請に応え全面的に協力したのである。

辞典刊行会は本間氏を中心に、外部からの支援で残額分を得るべく懸命の努力をした。いくつあった財団や個人からの助成金の話も実らなかったが、同年四月、本間氏の奔走の結果、日本通運榊福島敏行社長から『中日大辞典』の予約金として多額の資金援助の申

し出を受けた。刊行会は中国へ一定部数の辞典を贈呈することを条件としての資金援助、すなわち辞典予約金方式を募ることにして、これを広くマスコミに呼びかけることとした。その結果、日本通運に引きつづき朝日新聞社・毎日新聞社から大口の予約を得ることができ、さらに貿易商社や個人などからも多数の予約が得られた。それでもなお若干の不足が生じたが、この部分は初版売り上げ金から返済することを条件に、大学より貸付けを受けることとなり、ようやく印刷費の目処が立つに至った。

印刷は大安を通して二、三の印刷会社に打診の結果、図書印刷㈱に依頼された。同社は日本で未使用の簡化字二千数百字の母型を新鑄することに踏み切ったので、一九五六年中国国務院が公布した簡化字は全て採り入れることができたが、簡化偏旁をもつ約四〇〇〇の漢字については作成費用の負担ができず断念せざるを得なかった。この分は後に、増訂版発行の際に初めて可能となった。印刷は従来の活版印刷によるもので、静岡県沼津市の同社原町工場で行なわれ、工程の後半にしばしば同工場出張校正を行なった。

なお校正は学外からの専門家の応援や、こまごました点検には本学学部生多数の協力を得た。印刷にかかってから二年十カ月後の一九六八(昭和四十三)年一月末、ついに『中日大辞典』が誕生した。編纂開始から数えて十三年間かかったことになる。

二 『中日大辞典』の出版・評価

初版の出版 『中日大辞典』B6版、八ポイント活字横二段(各段二十三字×七十行)組み、頁当り字数三二二〇字である。日本語索引六十八頁、漢字部首索引八十八頁、付録十一種二十頁、本文一九四七頁で総頁数二二二三頁となった。採録した見出し字(親字)は簡化字二二三八字を含む七八七八字と、簡化字に対応する繁体字・異体字三三二七字を併記し、総計一万一一九五字である。日本語索引には約一八八〇〇語を載せ、例文中からも引くことができるよう工夫を加えた。辞典見出し語は約十二万語に及んだ。

黒に近い濃紺の表紙に、曹全碑(漢隸の代表作)から採録した「中、日、大、辞、典」の六字の金文字がよく映えた。日中文化交流のための愛知大学の事業として作られたものであるという観点から、華日辞典刊行会では利用者の負担を考慮し、定価三〇〇〇円と破格の値段に設定した。

一九六八年二月一日、『中日大辞典』は初刷一萬冊、大安を総発売元として売り出された。

四月十二日、豊橋校舎四十番教室(現4号館情報処理センター実習室)において中日大辞典出版記念講演会が行なわれた。挨拶を玉城肇学長・本間名誉学長・坂本一郎関西大学教授の三氏が行ない、ひきつづき編集に当たった三名、すなわち鈴木擇郎教授が「中国の文字改革」、今泉潤太郎助教授が「日中漢字の異同」、内山雅夫教授が「中日大辞典の編纂を顧みて」と題し記念講演を行なった。同日夜、豊橋市内陽華楼において本学教職員主催祝賀会が催された。

同年六月、辞典予約分二二〇〇部を一括して予約者の名義で、中華人民共和国貿易部駐

日代表事務所（国交正常化以前の中国政府の出先機関）を通し中国日本友好協会へ贈呈し、これまでの好意に感謝するとともに、この辞典に対する中国各方面の批評を請うた。

六月二十一日付で同協会から大安を経由して、辞典刊行会に礼状が届いた（原文横書き。中国文は以下同）。

貴会贈给我会的《中日大辞典》一二〇〇册如数收到。对此隆重的赠品，谨致谢意。

貴会经过多年的努力，编纂出版了《中日大辞典》，它对于日本人民学习毛泽东思想，了解中国社会主义革命和社会主义建设，特别是史无前例的无产阶级文化大革命，从而发展中日友好和文化交流将起积极作用。对贵会为此而辛勤劳动所取得成果，谨致祝贺。

我会将不辜负贵会的厚志，拟将这批辞典分送给各有关单位 and 人士参考、使用，以资中日两国人民的相互理解，进一步发展两国人民的战斗友谊。

文化大革命の渦中を物語る言葉でいるどられてはいるが、辞典は必ず中国各地へ送られ広く利用されるものと期待され、事実その期待は裏切られなかった。

辞典は中国以外の世界各国の、アジア研究で著名な大学図書館へも愛知大学の名で贈呈されたが、なかには受領通知の来ないものもあった。

辞典への評価 『中日大辞典』は一定の中国語の学力をもつ日本人が中国の新聞・雑誌・

一般書を読む場合に直接役立つ辞書、いわば『広辞苑』の中国語版の如きものを目指した。

刊行後、世評は概して好意的であった。前記の辞典出版記念講演会で坂本一郎氏は「予想以上に立派な出来ばえで世界のトップの中国語辞典だ。中国語学界の一人としてお礼を述べたい」と述べている。

『朝日ジャーナル』は書評欄で実藤恵秀早稲田大学教授が「語彙は政治、科学用語から方言、成語、諺、古語におよび（…）読者に親切な編集である」と評した。毎日新聞は記事の中で「この辞典の出版によって、日本は中国に関しては世界の学界に誇りうる金字塔を建てたとと言っても過言ではあるまい」と賛辞を呈した。中国語学界では、『三省堂言語大辞典』（一九八九年）中の中国語の項目での「外国人の編んだ二言語対照辞典もかなりの数にのぼるが、主要言語の中から今日の用にたえるものを一種類ずつあげておく」と、日本では愛知大学中日大辞典が「これまで日本語で出たものも広範な辞典。語彙の選択には首をかしげるようなところもあるが、原資料から採録しているので、他人の辞典をひきうつしにした辞典にない確かさをもっている。一九八六年に大修館から新版がでた」との橋本萬太郎氏の評に要約されよう。

中日新聞社は一九六八年度の中日文化賞候補五十九件、四十三人を審査の結果、四件に對して第二十一回中日文化賞を贈ることとし、『中日大辞典』編集グループもこれに入り、正賞・副賞・賞状額が贈られた。

辞典編纂処の解散

『中日大辞典』出版を機に鈴木・内山・今泉の編集メンバー各氏は協議した結果、所期の目的を達成したとして編集委員会・華日辞典編纂処を解散することに意見の一致を見、大学当局に申し出てその了承を得た。十数年にわたる苦労がやっと実を結んだという充実感と解放感にひたっているメンバーにとっては、辞典改訂などといった問題意識は稀薄であり、したがって、この辞典編纂処の解散ということのもつ重大性は当事者によって看過され、後日改訂版編集の際に大問題として浮上することになったのである。

辞典編纂処所蔵図書・各種器材・備品などはそれぞれ学内の関係各部署に引きとられた。十数年間にわたり作成された、三十数万枚にのぼる辞典カード（少数の返還されたカードを整理したものを含む）は学内のどこにも保存する場所がなく、一部分の辞典未収録カードのみ三氏の個人研究室にとりあえず分散保管して、残りは全て破棄された。

これより以降、『中日大辞典』にかかわる一切の業務は、華日辞典刊行会を改組した中日大辞典刊行会により処理されることとなり、その事務は庶務課所管と定められた。

中日大辞典刊行会規約は、

目的 中日大辞典の刊行、日中文化交流への貢献

役員 評議員若干名、評議員は学長、法経学部長、文学部長、教養部長、中国語担当教員および中国関係学科担当教員より選任された者、『中日大辞典』の編纂刊行に貢献した学者中より委嘱。監事二名。幹事若干名。

その他 本出版による利益を以って（一）日中文化交流に貢献する学術出版、（二）日本中国間の留学その他を補助する。

ことを骨子とするものである。

中国における辞典座談会

辞典編纂期間中、中国における言語政策の決定や変更など、直接編集上に影響を及ぼす問題を処理するなかで、文字改革委員会・言語研究所などに対して中国側の見解を求め、質問状を出したこともたびたびあり（ほとんど返事は来なかった）、また本学を訪問する中国代表团との接触の折に教示を受けたりしてきたが、辞典の完成を機に何としても訪中して直に『中日大辞典』に対する批評を受けたいとの編集メンバーの思いを、辞典贈呈の際に郭沫若氏に申し伝えてあった。また、辞典印刷中の一九六六年に始まった文化大革命のなかで生まれた新事象を反映する新語については、そのたびにカードの作製をしており、新事象についても実際に見聞きたい思いがあった。しかし中国における文化大革命の進行を見れば到底この希望がかなえられるはずもなく、訪中の実現はますます遠ざかるばかりであった。

一九七一（昭和四十六）年九月、細迫朝夫学長は辞典関係者の訪中への熱意をうけ、折から日本中国友好協会代表団員として訪中する穂積七郎前代議士に、増刷されたばかりの

辞典第二副版に添えて愛知大学学術代表团派遣要望書を託し、郭沫若氏へ届けてもらった。

¹₂

翌七二年一月、学長宛てに中国日本友好協会から手紙が届いた。

細追朝夫先生

您给郭沫若先生的信，郭先生已经读过并表示感谢。铃木樺郎教授等访华事，已托有关部门研究。

新年之际，敬祝身体健康。

中国日本友好协会 一九七二年一月三日

公箋・公印も使用せず、市販の便箋に走り書きしたもので、文化大革命中の緊迫感が伝わってくる手紙であった。しかも内容から見て訪中の可能性はそう高くないと判断された。この間中国をとりまく国際情勢は急変した。前年七月のニクソン米国大統領の訪中予告の発表は、米国に追隨して中国封じ込め政策に忠実であった日本政府に衝撃を与え、さらにこの年二月、米中共同声明の発表に至ると、日本は急遽、九月に田中角栄首相・太平正芳外相が訪中、ここに日中国交正常化が実現し、両国関係は新しい段階に入ったのである。

一九七三年五月、折からの大学紛争の中で就任したばかりの久曾神昇学長宛てに、南開大学から電報が入った。これによると国務院科教組（文化大革命中の教育科学技術に関する主管機関で、従来の教育部にかわるもの）から南開・北京・復旦三大学に対し愛知大学代表团受入れの要請があり、南開大学が責任校として世話にあたるという内容の招聘状であった。辞典関係者は朗報に喜び、あわただしく協議した結果、愛知大学学術訪中団として鈴木樺郎教授（団長）・今泉潤太郎助教授（秘書長）・池上貞一教授・中島敏夫助教授の四名を派遣することが、辞典刊行会により決定された。この代表团をもつて本学の海外派遣代表团の嚆矢とするが、同時に八〇年代から始まる本学の本格的な国際交流の幕開けを告げる出来事でもあった。

一九七三年六月の『愛大通信』創刊号は、「ついに訪中実現し中国南開大学から招待電報届く、六月上旬に本学学術訪中団出発」として紹介され、同年十一月の同通信第2号は、「本学と中国の『きずな』復活、中国訪問で大きな成果、高く評価された中日大辞典」の見出しでこれを詳しく報じた。それによれば、一行は六月十五日香港着、翌日、香港側の羅湖より歩いて橋を渡り中国側の深圳に入り、出迎の旅行社通訳に案内され広州に着くと南開大学李何林教授らが駅頭に出迎えた。李教授は著名な中国文学者であり、この後、一行が中国を離れるまでの三週間、高齢にもかかわらず常に同行した李教授の誠実な態度に全員が感銘をうけ、国際交流における応待について貴重な示唆をうけた。

天津の南開大学での『中日大辞典』座談会はまる二日間おこなわれた。同大学の関係分野の専門家が事前に整理検討した問題点を歴史学の吳廷璆教授、中国語学の邢公畹教授などが代表して発表する形で進められた。座談会は具体的直接的かつ建設的な討論の場とな

った。『中日大辞典』に対する評価とともに、さらに充実した内容とするための共同作業を通してえたこの貴重な体験が、辞典改訂の起爆剤となったのである。北京大学では時間などの関係（当時の同校固有の事情もあったようである）から『中日大辞典』に関する座談会は開かれず、言語学の周祖莫教授、文学の林庚教授、日本語学の卡立強教授らと懇談した。上海の復旦大学では日本語学の蘇徳昌助教授が中心となり、『中日大辞典』の語釈・用例など具体例を挙げ熱の入ったやりとりの座談会がもたれた。三校の対応ぶりは、のちに本学が中国との交流を始めるにあたり、大きな役割を果たすことになる。

また、辞典カード返還の恩人ともいふべき郭沫若氏を表敬訪問し謝意を述べることも代表团の任務であったが、幸い人民大会堂「北京庁」で対面し謝辞を述べる機会を与えられた。残念ながら鄭振鐸氏はすでに物故していた。この会見は六月二十四日、人民日報の国際面に「友好深める日本学者」として写真入りで大きく報道された。北京では、現地で新聞記者や商社員として活躍中の本学卒業生数人と会食した。

なお、南開大学では四名が研究報告を求められ、同校の階段教室において多数の教職員・院生を前に講演し、学術交流を行なった。報告終了後、この席上で、鈴木教授は久曾神学長より付託された「愛知大学の南開大学に対する学術交流¹³⁾」の提案を行なった。これが十年後に日中の大学間協定の第一号となる、両校の学術教育交流に関する協定として実現するのである。七月六日、三週間に及ぶ訪中を終え、一行は帰校後、記者会見を行い、翌日の中央紙・地方紙で『中日大辞典』と愛大の学術交流について大きく報じられた。

（後略）

註

1 『中日大辞典』（初版、愛知大学中日大辞典編纂処、一九六八年）「編者のことば」による。

2 「日立上海東亜同文書院大学交接書」（霞山会『東亜同文会史論考』、一九九八年、東亜同文書院（大学）については第一章第一節参照、三三〇頁）によれば同年十一月十三日から十二月十五日までに接收が行なわれた。ただしこの中には辞典カードは見あたらぬ。

3 陳福康『鄭振鐸年譜』（一九八八年、三五九頁）に「九月二十日、晨出、至办公处、至同文书院接收、经过情形甚好、惟资料室已空、大是可惜」とある。

4 一九九四年九月十五日付、島田政雄氏から中日大辞典編纂所長宛ての書簡「華日辞典原稿カード返還までの経緯御問合せの件について」による。

5 元東亜同文書院中国語教員とは鈴木樺郎・熊野正平・野崎駿平・坂本一郎・内山雅夫の各氏。

6 鈴木樺郎「中日大辞典の思い出」（『滬友』三二二号、一九七二年、三十七頁）。

7 返還されたカード中に「新華辭書社資料卡」と印刷されたカード数枚がまぎれ込んでいた（同社『新華字典』は一九五三年初版発行以来、今日まで版を重ね、億単位の出版部数をもつポケット判の辞書である）。このことは同文書院で作られた辞典原稿カードが利用価値ありとされ、いったんは新華辭書社の管理下におかれていたことを物語る。

8 豊橋校舎逍遥館外壁の「愛知大学」の四文字は、これ（原文は縦書き）から採ったも

の。

⁹ 鈴木擇郎・熊野正平・野崎駿平・坂本一郎・内山雅夫各氏の「新中国に形成されつつある新語彙の総合研究」に対するもの。

¹⁰ 大山茂「歴史的意義をもつ『中日大辞典』ついに公刊」『大安社史』、一九九八年、一七二頁）。

¹¹ 小林実弥「中日大辞典の出版」『日中の架け橋―中国事情紹介の四〇年』、一九九五年、五十九頁）。

¹² 一九七一年九月二十六日朝日新聞名古屋本社版第一面トップに「日中親善へ新風、初の大学交流 愛大が視察団計画 将来は留学生も」の見出しで報道された。

¹³ ①南開大学教授の訪日を歓迎する。②双方は教授の留学を援助する。③双方は学生との交流を援助する。④研究資料図書出版物の交流を行なう。（第三章第五節（1）参照）

注 『愛知大学五十年史 通史編』より抜粋。